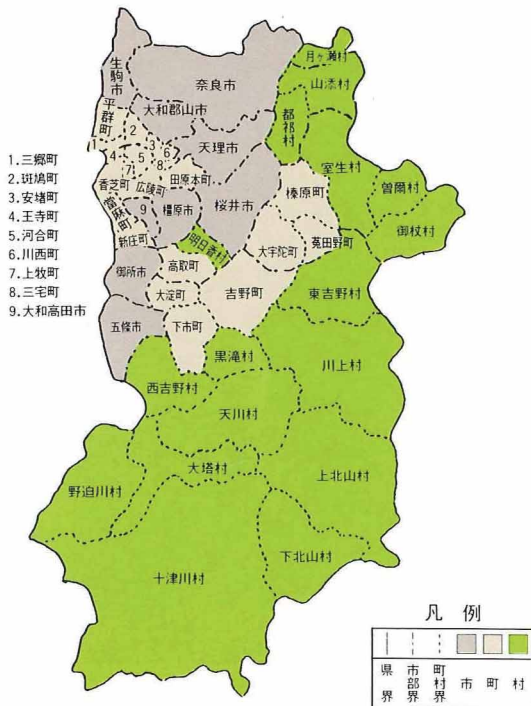


行政区画

市町村数……9市21町17村



位置

近畿の屋根といわれる山岳地帯を南部に持つわが奈良県は、わが国のほぼ中央部、紀伊半島の真中に位置し、周囲を山岳に囲まれた内陸県である。

	経緯度	位置
東端	東経136度12分	宇陀郡御杖村大字神末
西端	東経135度33分	吉野郡野迫川村大字弓手原
南端	北緯33度52分	吉野郡十津川村大字竹筒
北端	北緯34度47分	生駒市高山町

東西の距離 64.13km

南北の距離 102.22km

県庁所在地 奈良市登大路町

面積

奈良県の面積は、全国面積(377,727.37km²)の約1%の3,690.41km²である。

吉野郡十津川村は全国1位の巨村で県総面積の18.2%を占め672.35km²である。また本県最小は、磯城郡三宅町で4.05km²である。

	面積	割合
奈良県	3,690.41km ²	100.0%
市部	698.16km ²	18.9%
郡部	2,992.25km ²	81.1%

地 形



紀伊半島

本県の地形は、県のほぼ中央を西流する吉野川を境として北部の低地帯と南部の山岳地帯に分かれている。その吉野川にほぼ沿って中央構造線が通り、北部は内帯、南部は外帯に属しており、非常に対照的な地勢を示している。

★北部低地帯……複雑な丘陵と小盆地からなり、大別すれば大和高原、宇陀山地、奈良盆地からなり吉野郡を除くほとんどの市町村はこの北部低地帯に属している。

大和高原は奈良盆地と上野盆地にはさまれた高原で、北は木津川、南は初瀬川、宇陀川によってくぎられている。ほぼ400～500mの標高をもち、なだらかな小丘陵が起伏、河川は少ない。添上、山辺郡の各村があり古くから開発されている。山添村では縄文時代草創期の土器が発見されている。

宇陀山地、宇陀盆地、高見山地、室生火山群および竜門山地（独立地形区とも考えられる）からなる複雑な地形区は、大和高原の南方に位置し東部は鈴鹿山脈・布引山地に接し、西は竜門山地を経て金剛山地に、南は吉野川に沿う中央構造線におよぶ。

奈良盆地は県の北西部を占めており、面積は約300km²で、盆地底の標高が40～80mの沖積層盆地である。盆地面積は県全体の8％にすぎないが、この平坦で肥沃な地域は水田耕作に適し、古代には国政・文化の中心地であった。今も県の中核的位置を占めている。

河川は盆地の四周から小河川が集まってきている。それらは大和川となって大阪湾へ注いでいる。

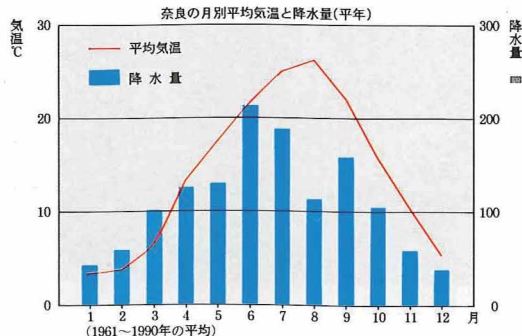
また奈良盆地と大阪平野を隔てる金剛山脈が南北に走り、標高1,125mの金剛山をはじめ、葛城山、二上山、生駒山などの山々が約45kmにわたって連なっている。成因は断層作用によるが、二上火山群なども含む地形区である。

★南部山岳地帯……県総面積の60%以上を占めるこの地区は、紀伊山地の主部にあたり、東部の大台ヶ原山（標高1,695m）を中心とする台高山脈、西部の伯母子山地、さらに中央部の十津川、北山川の深い渓谷にはさまれて大峰山脈が連なる大山岳地帯である。その雄大な壮年期の地勢は北部低地帯とは対照的である。

また河川は、吉野川、北山川、十津川などいずれも壮年期河川が深いV字渓谷をなして曲流し、山岳美と渓谷美にすぐれている。この地域は吉野熊野国立公園の主要部であり、林産資源とともに本県の重要な観光資源となっている。

気 象

本県の気候はその地形と同様南北で大きく相違する。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候である。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねている。すなわち南部の山地は夏は雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深い。一方奈良盆地はおおむね雨は少なく、夏はむし暑く、冬は底冷えがきびしい。全般的には台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山・がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っている。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起こる。



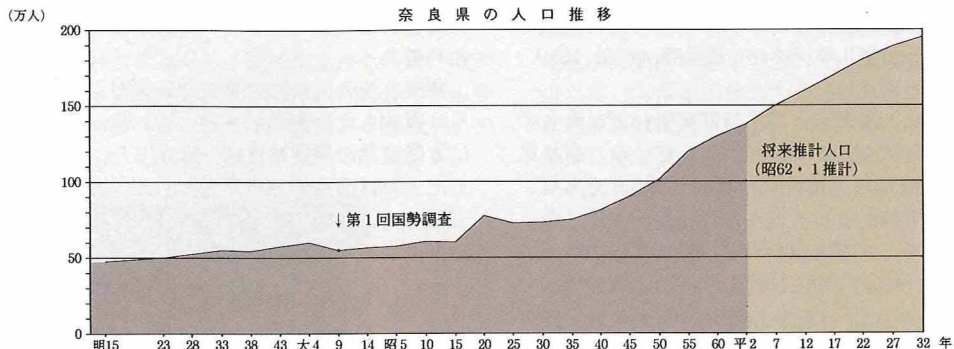
人 口

石器の材料サヌカイトの産地二上山をもつ奈良県では旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られている。

先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、近畿の人口は縄文時代にはほぼ300人～4,400人の間で推移していたが、弥生時代には108,300人程に急増したとされている。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであろう。

大和に朝廷が成立し政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなった。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくみると7万人前後、多く見積って20万人の人口を持ったといわれる。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/㎢程になり、唐の長安よりやや少なく平成元年の大阪市(12,000人/㎢)より多くなる。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことには変わりはない。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については



※明治15～43年は現住人口、大正9～平成2年「国勢調査」、平成7年以降厚生省人口問題研究所「都道府県別将来推計人口」

13万人説と6万5千人説とがある。当時の政府が必ずしも全ての人々を把握していないため、実際の人口はどちらの推計でももう少し多かったであろう。

中世の人口は史料がないため知ることができないが、江戸時代になると八代将軍徳川吉宗の時代の享保6年(1721)から始められた全国人口調査がある。第2回目は同11年に実施され、以後6年毎に行われた。この調査は、武士の人口や年少者の人口などが除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口よりいくぶん過少であると思われる。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができる。

享保6年の413,331人を100とすると、天明6年(1786)には81.4(336,254人)にまで減少するが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年(1846)には87.4(361,157人)にまで回復している。

明治の初めには、本県の人口もほぼ実勢に近くなり、明治5年(1872)には423,004人となっている。奈良県再設置当時の明治20年(1887)には491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示している。

大正9年(1925)の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示したのである。

その後、人口は60万人程度で安定していたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にべ

ピーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加した。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部での過疎化が同時に進行したが、県全体としては著しい人口の増加をみることになる。国勢調査で対前回増加率をみると昭和45年で12.6%、55年では12.2%と高い伸びを示した。平成2年(速報)では、人口は1,375,478人であり伸び率は5.4%とやや鈍化している。

本県では昭和38年以来一貫して人口が転入超過であり、40年代、50年代の高い人口増加率の要因はおもに大阪を主とする他府県からの人口の流入によってもたらされた。これは県内産業の発展による労働力の吸収によるものというよりは、特に北西部地域が大阪大都市圏の通勤圏として包含され、ベッドタウンとしての役割を求められたためである。

従来、流入人口の就業先のかかなりの部分が大阪府にあり、買物も大阪指向であると言われるように人口の急増は本県産業の発展に直結しなかった。しかし、この急増した人口は潜在的な購買力として、また、潜在的な労働力として、今後の本県の産業発展を支える重要な支柱ともみることができる。

産 業

〔農業〕

恵まれた気象条件により古くから奈良盆地を中心に農耕文化が発達した本県は、中世には二毛作が始まり、近世になると綿花や菜種、煙草等の商品作物も広く栽培された。明治末期から大正時代にかけて10aあたり米の収穫が全国1・2を競っていたことから「奈良段階」と呼ばれていた。また、大部分が水田である奈良盆地で集約度の高い土地利用を行うため、早くから「田畑輪換」により、すいか、まくわ、もも、いちじく、いちご等を中心に野菜・果樹の栽培が行われた。

中山間や山村では地域の特性を生かして柿・茶等の栽培が盛んである。

最近では京阪神消費地への至近性を生かした農作物が栽培されており、収穫量が全国で10位以内の農作物も多数あり、特に茶・柿・いちごは「大和茶」・「奈良柿」・「奈良いちご」として全国市場に定着している。



しかし、社会情勢の変化により、農業の担い手の高齢化、農作物の輸入自由化、都市化や過疎化の進行による農地の改廃等と農業を取りまく環境は厳しい。

そこで、本県では21世紀に向け、ゆとりと活力のある農業をめざして、農業の進むべき方向を明らかにした「奈良県農業振興計画」(NAP21)を策定した。

〔林業〕

本県の林業は、県総面積の78%を占める豊富な森林面積と膨大な木材の蓄積を背景に県の基幹産業としての地位を占めてきた。

江戸時代から育林が始まった吉野郡の山林の半数以上は杉・檜で占められている。明治時代に多数の有力村外地主が、資産を増やす目的で山林経営にのりだした。そのため、本県の山林の大半は民有林で、その経営に独特な密植多間抜方法がとられていることと、地質及び気象条件に恵まれているため、いまでは1ha蓄積量は全国平均の1.5倍になっている。また、木材の輸送方法も筏流しから陸送に移行したことにより、吉野・桜井方面に木材工業が発展し本県地場産業に大きな位置を占めている。しかしながら、近年における山村の過疎化により、林業労働者の減少、高齢化の進行、また外材との競争の激化、代替材の進出、住宅建設による木材率の低下による木材需要の伸び悩み等林業を取りまく環境は厳しい状況にある。

〔工業〕

奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・薬・漆器・素麺・清酒・茶筌・割箸・赤膚焼・奈良晒など江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多い。

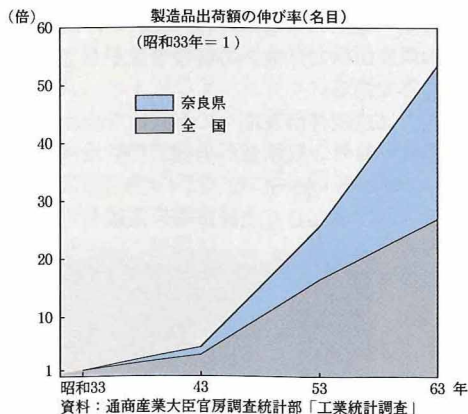
江戸時代には、早くからの農耕の発達による農村からの原料供給により、奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業が発達していた。明治7年（1874）には奈良県は全国府県中、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、菜種油9位の生産をあげ全国でも先進的な地域に属していた。そのため資金が豊富で明治16年（1883）には早くも近代的紡績工場が設立されたが、この工場は石炭の入手や、営業面でおもわしくいかず廃業となった。

明治26年（1893）、同29年（1896）に新たな近代的紡績工場がそれぞれ設立、同27年に電気・同44年にガスの供給がはじまるなどめざましく近代化していった。

しかし、奈良の位置が東西幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年（1919）にもちこされた。

昭和の初めには、紡績業の生産は安定し木綿や絹から変わったメリヤスや、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の形成も進んだが、戦争のために挫折するものがあった。

戦後、奈良県も復興の途についたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度経済成長期にも繊維、木材、食品等の業種が製造品出荷額で大きなウエイトを占めていた。本県は内陸に位置し港湾をもたないので、重化学工業には工場立地の上で制約が大きかった。このため、昭和30年代末から県では工業団地の開発に取り組み内陸型工業の誘致・育成に努めるとともに県内工業の活性化をめざし中小企業団地の開発を支援してきている。

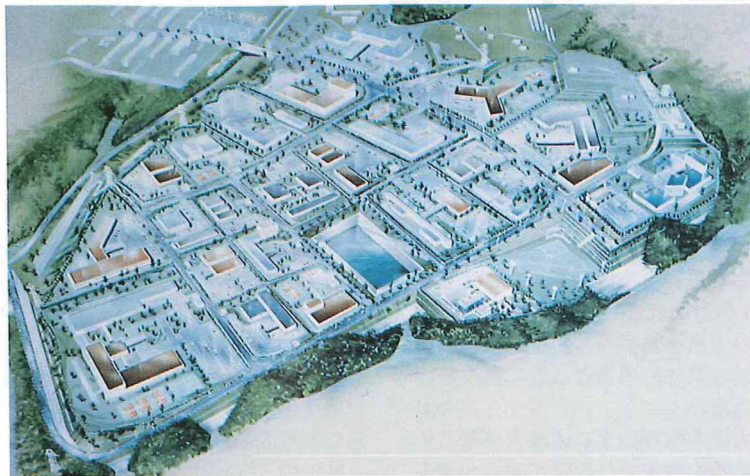


高度成長期の昭和39年以降、製造品出荷額は飛躍的に増加し、昭和33年を1とすると、昭和63年の全国は約28倍（名目）であるが、奈良県は約52倍（名目）の伸びを示している。

現在では、靴下・ニットなどの繊維、木材、機械・金属をはじめプラスチック成型、毛皮革製品、スポーツ用品など数多くの地場産業があり、中には靴下やスキー靴

のように全国1のシェアを占めるものもある。事業所数では軽工業の占める比率が高いが、製造品出荷額では重化学工業が50%を越している。

また、南和地域の活力ある発展をめざし、五條市にインテリジェント工業団地としてテクノパーク・ならを開発し企業の早期立地に努めている。



テクノパーク・なら完成イメージ

〔商業〕

江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ2大商業中心地であった。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展していた。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に包含され本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わらなかった。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（今の近鉄）上本町～奈良間の開通をはじめとする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるところもあった。

しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもあった。昭和5年の国勢調査によると、商業従事者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分1人で営業しているものが32%も占めていた。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（現、奈良銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献している。

昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、これに伴い商品販売額等も増加した。昭和63年の調査では、小売業の年間商品販売額等は前回の調査時に比べ



奈良市東向商店街

全国1位の伸び率を示している。しかし、大阪等への消費流出は大きく、奈良県の商業の一層の発展を図るために、その流出している購買力を引きとめるよう、今後は、県民のコミュニケーションの場となるような魅力ある商業を育てることが望まれる。



興福寺新能

本県の文化の萌芽はきわめて早く、多くの縄文・弥生時代の遺跡や、広大な前方後円墳を中心とした無数の古墳群がそれを物語っている。

古墳時代の終わりからわが国の政治権力は大和に集中し、文化もまた、飛鳥・奈良時代にシルクロードを経てもたらされた文化を吸収しながら、この地を中心に花開いたのである。

都が京都に移って後も、社寺を中心とした奈良の地は、

南都と呼ばれ、その文化的風土は能や狂言を生み出す土壌となった。

それらの文化遺産は、豊かな自然とともに県下のいたるところに数多く残され、新しい文化と融合し、本県独特の風土を造り出しているのである。

こうした豊かな文化遺産、歴史的風土の保存と、近年の急激な都市開発とをいかに調和させるかが、県政の重要な課題となっている。

本県の観光は、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財観光と、山岳地域の自然観光に大別される。

奈良、斑鳩をはじめとする各地の古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、国宝・重要文化財の数は、東京、京都についで多い。古社寺のほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡や南朝のおかれた吉野の地などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れるひとびとは後をたたない。

また、千年以上の歴史をもつ吉野山の桜、葛城高原の

つつじなどの季節の花々や、大台ヶ原の景観、大和アルプスと称される大峰山脈を中心に2,000m級の山々が連なる吉野熊野連山の雄大な自然が、全国的な都市化によって緑が失われていく中で今もなお美しい姿を残し、ひとびとにこころの安らぎを提供しているのである。

これらの豊かな文化遺産と、自然を求めて、年間3千8百万人ものひとびが、本県を訪れている。「物見遊山」から文化や自然にふれる観光へとうつり変わりつつある時代、奈良県は、ますますその価値を増しつつあるのである。



春の三輪山

主要山岳一覽表

(單位：海拔m)

山 岳 名	標 高 _m	所 在 地	山 岳 名	標 高 _m	所 在 地
若 草 山	342	奈 良 市	行 者 還 岳	1546	吉 野 郡 天 川 村
春 日 山	496	〃	八 劍 岳	1915	吉 野 郡 上 北 山 村
耳 成 山	140	橿 原 市			(天川村境)
天 香 久 山	152	〃	仏 生 ケ 岳	1805	吉 野 郡 上 北 山 村
畝 傍 山	199	〃			(十津川村境)
竜 王 山	586	天 理 市	釈 迦 ケ 岳	1800	吉 野 郡 十 津 川 村
		(桜井市境)			(下北山村境)
卷 向 山	567	桜 井 市	孔 雀 岳	1779	吉 野 郡 十 津 川 村
生 駒 山	642	生 駒 市			(下北山村境)
		(大阪府境)	大 日 岳	1593	〃
二 上 山	474	北 葛 城 郡 當 麻 町	大 神 野 山	619	山 辺 郡 山 添 村
(雌 岳)		(大阪府境)	鎧 岳	894	宇 陀 郡 曾 爾 村
葛 城 山	960	御 所 市	兜 岳	920	〃
		(大阪府境)	高 取 山	584	高 市 郡 高 取 町
金 剛 山	1125	御 所 市	俱 留 尊 山	1038	宇 陀 郡 曾 爾 村
		(大阪府境)			(三重県境)
荒 神 岳	1260	野 迫 川 村	高 見 山	1249	吉 野 郡 東 吉 野 村
護 摩 壇 山	1372	十 津 川 村			(三重県境)
		(和歌山県境)	国 見 山	1419	〃
山 上 ケ 岳	1719	吉 野 郡 天 川 村	三 津 河 落 山	1654	吉 野 郡 上 北 山 村
稻 村 ケ 岳	1726	〃			(三重県境)
大 普 賢 岳	1780	吉 野 郡 上 北 山 村	日 出 岳	1695	〃
		(川上・天川村境)	玉 置 山	1076	吉 野 郡 十 津 川 村
		〃	伯 母 子 岳	1344	吉 野 郡 野 迫 川 村
国 見 岳	1655	(天川村境)			(十津川村境)

主要河川一覽表

(延長10,000m以上)

平成2年3月31日現在

河川名	延長 _m	上流端	河川名	延長 _m	上流端
淀川水系	286,100		布留川	11,220	天理市荳原町字下代
宇陀川 <small>(黒川を合む)</small>	26,160	宇陀郡大宇陀町大字宮奥	岩井川	10,150	奈良市紀寺町字中谷
布目川	24,000	天理市福住町字馬返	紀の川水系	350,290	
青蓮寺川	16,850	タコラ川の合流点	紀の川 <small>(湖川を合む)</small>	70,050	吉野郡川上村(三ノ公川合流点)
名張川	16,300	オオクタ川の合流点	丹生川	32,100	吉野郡黒滝村大字中戸
白砂川	14,700	奈良市横田町	高見川	22,300	吉野郡東吉野村大字杉谷
笠間川	14,400	山辺郡都祁村大字吐山	津風呂川	17,600	宇陀郡大宇陀町大字栗野
室生川	13,400	宇陀郡室生村大字田口	四郷川	13,200	吉野郡東吉野村大字麦谷
芳野川	13,240	宇陀郡菟田野町大字岩崎	宗川	12,000	吉野郡西吉野村大字西日裏
遅瀬川	11,800	山辺郡山添村大字切幡	新宮川水系	414,612	
打滝川 <small>(今川を合む)</small>	10,300	奈良市別所町	新宮川 <small>(天川・天川を合む)</small>	113,700	吉野郡天川村大字北角
大和川水系	591,332		北山川	50,540	吉野郡上北山村大字西原
大和川	42,371	桜井市大字小夫地先	川原樋川	27,800	吉野郡野迫川村大字松股
曾我川	26,896	御所市大字重阪	西川	22,100	吉野郡十津川村大字小坪瀬
寺川	23,270	桜井市大字鹿路	東の川	14,500	吉野郡上北山村大字小椽
葛城川	23,246	御所市大字鴨神	上湯川	13,200	吉野郡十津川村大字上湯川
飛鳥川	22,296	高市郡明日香村大字栢森	西の川	12,900	吉野郡下北山村大字池峰
富雄川	21,614	生駒市高山町	神納川	12,300	吉野郡十津川村大字杉清
佐保川	14,823	奈良市中ノ川町	旭川	11,100	吉野郡十津川村大字旭
葛下川	14,740	北葛城郡當麻町大字南今市	中原川	11,000	吉野郡野迫川村大字上
高田川	13,045	北葛城郡新庄町大字南藤井	小原川	10,840	吉野郡大塔村大字篠原
竜田川	13,239	生駒市俵口町			